

Movie Review 27 #チャップリンの独裁者

『#チャップリンの独裁者 (The Great Dictator)』(1940年、チャールズ・チャップリン監督・製作・脚本・主演)をNHKBSで視聴した。チャップリン映画初の完全トーキー作品として有名。アカデミー賞の数々の賞にノミネートされた。ニューヨーク映画批評家協会賞の主演男優賞を授与されたが、チャップリンは受賞を拒否している。日本初公開は1960年。日本での興業収入はこの年の興業収入第4位となった。この年のキネマ旬報で外国映画の第1位にランキングされた。

当時のヒトラーの独裁政治を批判した作品で、近隣諸国に対する軍事侵略を進めるヒトラーに対して非常に大胆に非難と風刺をしつつ、欧州とユダヤ人の苦況をコミカルながらも生々しく描いている。

数回観ているのに最後の演説の場面しか覚えていなかった。

映画は第一次世界大戦(映画「西部戦線異状なし」を参照)で主人公(床屋)が敵陣への突撃を前にしたシーンから始まる。戦闘の最中、前線で味方とはぐれ、負傷した飛行士官のシュルツを偶然救出する。シュルツが所持している重要書類を本国に届けるべく二人は小型飛行機で飛び立つが、飛行機は燃料切れにより墜落してしまう。生き延びた二人は味方に救助されるが、トメニアがすでに降伏していたことを知らされる。シュルツが大いに悲しむ一方、床屋は墜落の衝撃で戦場での記憶をすべて失っていた。

床屋が病院で過ごしている数年の間にトメニアでは政変が起こり、ヒンケル(チャップリンの一人二役)がヒンケル党を率いて独裁者として君臨している。自由と民主主義を否定し、国中のユダヤ人を迫害するようになっていた。

病院を抜け出した床屋が自宅兼理髪店に戻ってくる。記憶消失のまま、ゲットーの隣人たちに暖かく迎えられ、ハンナという若い女性と親しくなる。

ある日、突撃隊に反抗し、吊るし首にされそうになったところにシュルツ(今では突撃隊長)が通りかかり、床屋がユダヤ人と知って以前助けられた恩から、床屋を助ける。

ヒンケルは隣国のオーストリッチ侵略を企てている。資金援助を断られるとユダヤ人迫害を命じる。ゲットーを襲うように命令されたシュルツがこれに反対し、強制収容所に送られてしまう。

強制収容所から脱出したシュルツはゲットーに逃げ込み、ヒンケルの暗殺を計画するが、突撃隊に発見され、床屋と共に再び強制収容所に送られる。ハンナたちゲットーの住人たちはつてを頼ってオーストリッチへ避難し、農園で働きな

がら幸せに暮らし始める。

ヒンケルと隣国の独裁者、オーストリッチ侵攻で争い、激しい交渉を繰り返す。結局ヒンケルはすぐにオーストリッチ侵攻を決行する。ハンナたちの農園も突撃隊の暴力を受ける。

床屋とシュルツはトメニアの軍服を奪い、強制収容所から逃げ出す。二人を捜索していた兵士たちは、狩猟中のヒンケルを床屋と間違えて逮捕してしまう。逆に床屋は将兵たちによってヒンケルに間違えられ、シュルツと共に丁重に扱われる。トメニア軍に占領されたオーストリッチの首都へ連れていかれ、大勢の兵士が集う広場で演説を行うことになる。最後の 6 分間の演説シーン。演説を終えた床屋は兵士たちの拍手喝采の中、ハンナに対して、希望を捨てないようラジオを通じて語りかける。絶望に打ちひしがれ地に伏していたハンナが床屋の言葉を耳にしてゆっくりと立ち上がり、空を見つめるシーンで映画は幕を閉じる。

劇中、意味不明のデタラメ語をヒンケルが話す、エスペラント語等の諸説がある。独裁者とその側近など名前は、ナチス党の幹部の名前をイメージさせるものとなっている。

最後の 6 分間の演説シーンは圧巻である。静かに語り掛け、徐々にクライマックスに達する。

「申し訳ないが……。私は皇帝になどなりたくない。私には関わりのないことだ。支配も征服もしたくない。できることなら、皆を助けたい。ユダヤ人も、ユダヤ人以外も、黒人も、白人も。私たちは皆、助け合いたいのだ。人間とはそういうものなのだ。お互いの幸福と寄り添いたいのだ……。お互いの不幸ではなく。憎み合ったり、見下し合ったりしたくないのだ。世界で全人類が暮らせ、大地は豊かで、皆に恵みを与えてくれる。人生は自由で美しい。

しかし、私たちは生き方を見失ってしまった。欲が人の魂を毒し……。憎しみと共に世界を閉鎖し……。不幸、惨劇へと私たちを行進させた。私たちはスピードを開発し、自分たち自身を孤立させた。ゆとりを与えてくれる機械により、貧困を作り上げてしまった。知識は私たちを皮肉にし、知恵は私たちを冷たく、無情にした。私たちは考え過ぎ……。感じなさ過ぎる。

機械よりも、人類愛が必要なのだ。賢さよりも、優しさ、思いやりが必要なのだ。そういう感性なしでは、世の中は暴力で満ち、全てが失われてしまう。飛行機やラジオが、私たちの距離を縮めてくれた。そんな発明の本質は、人間の良心に呼びかけ、世界がひとつになることを呼びかける。

今も、私の声は世界中の何百万の人々のもとに届いている。何百万もの絶望した男性たち、小さな子供たち。人々を苦しめる組織の犠牲者たち。罪のない人たち

を投獄させる者たち。私の声が聞こえている人たちに言う……。絶望してはいけない。私たちに覆いかぶさる不幸は、単に過ぎ去る貪欲であり、人間の進歩を恐れる者たちの憎悪なのだ。

憎しみは消え去り、独裁者たちは死に絶えるであろう。人々から奪いとられた権力は、人々のもとに返されるだろう。決して人間が永遠に生きないように、決して自由が減びることもない。

兵士たちよ。獣たちに身を託してはいけない。君たちを見下し、奴隷にし、人生を操る者たちは、君たちが何をし、考え、感じるかを指図する。君たちを鍛え、食事を制限する者たちは、君たちを家畜として、ただのコマとして扱うのだ。身を託してはいけない。そんな自然に反する者たちなどに。機械人間たち……。機械のマインドを持ち、機械の心を持つ者たちなどに。

君たちは機械じゃない。君たちは家畜じゃない。君たちは人間だ。心に人類愛を持った人間だ。憎んではいけない。愛されない者が憎むのだ。愛されず、自然に反するものだけだ。

兵士よ。奴隷を作るために闘うな。自由のために闘え。『ルカによる福音書』の17章に、「神の国は人間の中にある」とある。ひとり人間ではなく、一部の人間でもなく、全ての人間なのだ。君たちの中になんだ。君たち、人々は力を持っているんだ。機械を作り上げる力、幸福を作る力を持っているのだ。君たち、人々が持つ力が、人生を自由に、美しくし、人生を素晴らしい冒険にするのだ。

民主国家の名のもとに、その力を使おうではないか。皆でひとつになろう。新しい世界のために闘おう。常識ある世界のために。皆に雇用の機会を与えてくれ、君たちに未来を与えてくれ、老後に安定を与えてくれる世界のために。そんな約束をして、獣たちも権力を伸ばしてきた。しかし、奴らは嘘つきだ。奴らは約束を果たさない。これからも果たしはしない。独裁者たちは自分たちを自由にし、人々を奴隷にする。

今こそ、闘おう。約束を実現させるために。闘おう。世界を自由にするために。国境のバリアをなくすため。欲望を失くし、嫌悪と苦難を失くすために。理性のある世界のために闘おう。科学と進歩が全人類の幸福へ、導いてくれる世界のために。兵士たちよ。民主国家の名のもとに、皆でひとつになろう。」

時間のない人は、この「最後の6分間の演説シーン」だけでもみて欲しい。